

絵本を活用して学生の読書量やリテラシーを高める 実践研究

～アクティブラーニングの方法論に基いて～

A Practical Research Using Picture Books to Increase the Amount of Reading and Japanese Literacy

大塚紫乃*, 浅川陽子**

【これまでの経緯と本研究の目的】

こどもコミュニケーション学科のカリキュラムには、絵本の読み聞かせやメディアとしての絵本活用の学習内容が、複数の正式な授業科目に入っている。いずれも体験をとおして学ぶことが大きなねらいである。

平成28年度の学内共同研究「絵本の読み聞かせを学びの場づくりと捉える実践研究—学生の省察力を高める方策を考える」の研究成果として、学生たちが「振り返りを書くときの教師からのキーワード提示」が有効であること、また、学生の気づきの共有に「少人数グループでのコミュニケーション」が重要であることがわかった。すなわち文字化することが苦手な学生にとって「書く手がかりの提示」が思考を促すのに役立つし、さらに学びを自覚化するには「他者からの声」が重要であるということが明らかになった。

しかし依然として本をほとんど読まない学生が多く、リテラシー（読む・書く・聴く・話す・まとめるなど言語活用能力）の向上に至らなかった。

そこで平成30年度は、絵本読み聞かせ体験によって読書意欲を高め、話し合う機会を多く取り入れて、読書量を増やし、リテラシーの向上をめざすことを研究目的とする。授業方法の改

善（アクティブラーニングによる実践）を視野に、新たな実践研究に取り組む。

引き続き、社会構成主義学習観とアクティブラーニングの方法論に基づき、学生の自己肯定感を確かなものにする、コミュニケーションを通して学びを深める体験の有用性を学生自身が自覚すること、の二つを研究を進める際の考え方の基本とする。

【本研究の特色】

1. 読書に無関心な学生たちが、隣接保育園での乳幼児への絵本読み聞かせ体験を手がかりにして、本を「読む」ことへの興味を高めることを実証する。

保育園での読み聞かせ体験を振り返って気づきを話し合う場をもつことにより、「読む・話す・聴く・感じる・書く」力を総合的に伸ばす。

2. 学びの場づくり＝自己理解と他者理解をめざす。その過程で、自分の成長を自覚し、肯定的に自己を捉えるような主体的な学びへの習慣を身につける。

3. 学科1・2年生の現状（読書習慣・絵本への興味など）の調査アンケートから取りかかり、関連科目をもつ教員同士のコミュニケーションによって、学生のリテラシーを高める方策を探究する。

* 江戸川大学こどもコミュニケーション学科

** 江戸川大学こどもコミュニケーション学科

【実践について】

1. 1年生の読書に関する授業実践

1年生では、6月から7月にかけて、ビブリオバトルを行った。ビブリオバトルは、自分が読んで面白いと思った本をひとり1冊紹介し、全ての本が紹介された後、参加者全員がどの本を読んでみたいと思ったかを基準に投票を行い、最多票の本を決めるものである。今回は、活字を読む読書の推進を目的としていたため、絵本以外の本を対象とした。

学年が4つのグループに分かれ、1回のビブリオバトルの参加者は10～12名であった。ビブリオバトルは4回行った。参加者の半分は発表者、半分は聴講者となり、学生は4回のうち2回発表を行った。1回あたり5、6冊の本が紹介された。

2. 2年生の絵本の読み聞かせ体験

2年生後期の選択科目「こどもと読み聞かせ・絵本」シラバス概要は以下のとおりである。特に、第7回から第11回までの全5回については、大学に隣接する保育園に実際に出かけて、園児への読み聞かせを行った。保育園での昼食前のひとときを「学生による絵本読み聞かせタイム」としたわけである。園の担任先生方の感想や意見を、その都度、園長先生がまとめてメールで届けてくださったのでタイムリーな反省材料にすることができた。「声が小さい。絵本が斜めになりがち」「季節にあった絵本、手遊びがあって良かった」「もっと長めでもよい」等、先生方からの言葉を学生たちは真剣に受け止めていた。学生は約6人ずつのグループに分かれ、体験5回のうち2～3回は読む立場、ほかは聞く見る立場として保育室に入った。「またきてね」という園児の声がとても励みになったようである。

第1回 オリエンテーション、絵本の魅力とは。

絵本の歴史、絵本賞について知る

第2回 視覚表現のメディアとしての絵本の位置づけを理解する

第3回【演習1】 私の「思い出の一冊」読み聞かせを互いに聞き合う

第4回【演習2】 演習1の体験を振り返る。昔

話、童話を基にした絵本について理解する

第5回【地域の図書館見学】 絵本を探す技術を身につけ、図書館の可能性を考える

第6回【地域の書店見学】 書店での出会いに関心を深め、絵本コンシェルジュ術を知る

第7回【演習3】 「はじめての絵本との出会い」読み聞かせをお互いに聞き合う。子どもの心をとらえる読み聞かせ技術について考える

第8回【演習4】 「一歳から二歳」お勧めの絵本、読み聞かせをお互いに聞き合う。子どもの知的発達と絵本との関わりについて理解する

第9回【演習5】 「三歳から四歳」科学絵本の場合、読み聞かせの留意点を知る。人を楽しませる手法（ホスピタリティ）を考える

第10回【演習6】 「就学前」幼小接続期にお勧めの絵本の読み聞かせをお互いに聞き合うブックトークの技術に関心をもつ

第11回【演習7】 「四歳から五歳」絵本黄金期と言われる時期の読み聞かせ技術について、お互いの読み聞かせを聞くことにより考察を深める

第12回 絵本が生まれる現場、絵本作家たちの思いや願いについて学ぶ

第13回 絵本づくり（大きさ・装丁の工夫）、絵本の編集について学ぶ

第14回 「大人の心を豊かにする絵本」について実例をあげながらディスカッションする

【調査方法について】

1. アンケートの対象者と実施方法

平成30年度に「読書に関するアンケート」を1年生と2年生を対象に、各学年2回行った。1年生は前期授業と最初と最後の4月と7月、2年生は後期授業の最初と最後の9月2月に実施した。1年生は、様々な保育に関する体験が行われる前の状態を把握し、2年生との比較を行うために対象とした。入学当初とその半年後に調査を実施した。2年生は、読み聞かせ体験の授業が行われた期間の前後に調査を実施した。人数は1年4月45名、1年7月44名、2年9月44名、2年2月40名であった。

授業時間内でアンケートを配布し、その場で回収した。アンケート実施の際に、成績には関わりないことと研究以外の目的では使用しないことを説明した。

2. アンケートの内容

アンケート内容は、三つの構成から成っていた。

① 本や絵本の読書習慣と量

大学生の読書量を調べる質問の信頼性を検討した平山(2017)を参考に、読書習慣と量に関する質問を作成した。問1と問2は普段の読書習慣について尋ねる質問で、問3～6は実際の読書量の指標となる質問であった。本(マンガや雑誌、教科書は除く)の他に、絵本についての読書量も尋ねるため、問4と問6を新たに加えた。質問は以下の通りであった。すべての質問に対し、数字を記入して回答させた。

具体的な質問内容は、表1の通りであった。

表1 本や絵本の読書習慣と量に関する質問

問1: あなたは <u>1週間</u> のうち、平均すると、 <u>だいたい何日</u> くらい本を読みますか。 ^{※1}
問2: あなたは <u>ひと月</u> に、平均すると、 <u>だいたい何冊</u> くらい本を読みますか。 ^{※1}
問3: あなたは先月(○月)に <u>何冊</u> くらい本を読みましたか。 ^{※2}
問4: あなたは先月(○月)に <u>何冊</u> くらい絵本を読みましたか。 ^{※2}
問5: あなたは自分の本を <u>何冊</u> くらい持っていますか。
問6: あなたは自分の絵本を <u>何冊</u> くらい持っていますか。

※1 質問内容が理解しやすいように、質問の一部に下線を付した。

※2 実施月に合わせて、○に具体的な月を挿入した。

② 絵本への関与

絵本に対する態度を調べるために、平山(2016)の「絵本への関与」の尺度を用いた。質問は12項目から成り、「絵本志向」、「絵本経験」、「読み聞かせ志向」の3因子(各因子4項目)に分かれることが示されている(12項目の質問は表4を参照)。

それぞれの質問項目に対して、「非常にあてはまる」を1、「わりとあてはまる」を2、「ややあてはまる」を3、「あまりあてはまらない」を4、

「ほとんどあてはまらない」を5、「まったくあてはまらない」を6とする、6段階評定を行った。得点として統計的に分析する際には、反対の得点(1を6点、2を5点、3を4点、4を3点、5を2点、6を1点)となるように処理をした。

③ 好きな絵本

「あなたの好きな絵本があれば、題名を教えてください。※題名が分からなければ、だいたいの内容を記入してください。※何冊でも可」と質問し、自由に記述してもらった。

【アンケート調査の結果と考察】

1. 大学生の不読率

読書に関する質問のうち、問1～4に対して0と回答し、本や絵本を読んでいない回答者の割合を計算した(表2)。「1週間のうち、平均すると、だいたい何日くらい本を読みますか」という質問に対しては、およそ7割が0日と答えており、読書の習慣が週単位では身につけていないことが明らかとなった。「ひと月に、平均すると、だいたい何冊くらい本を読みますか」という質問に対しては、およそ5割から6割が0冊と答えており、本学の学生の不読率の高さが示された。平山(2015)では、不読率が2006年には33.6%、2012年には40.1%であることが示されており、不読率の上昇を示す結果となった。

先月読んだ本の冊数や、先月読んだ絵本の冊数についての質問でも、全体的に0冊と答える割合が多かった。ただし、各質問について1年7月と2年1月に0冊と答える割合が低くなっていた(表2の網掛け部分)。これは、授業での課題と関連していると推測できる。この期間、1年ではビブリオバトル、2年では絵本の読み聞かせを行っていた。読書の習慣化にはつながっていないが、課題としてでも読書量が増えていることは、教員が学生に読書の機会を与える意味があると考えられる。

また、絵本の冊数に関しては、1年よりも2年のほうが0冊と答えた割合は全体的に少なく(表2の太枠部分)、学年が上がるとともに、保育の専門性を理解するようになり、絵本に対する意識も高まっていることが示唆された。

表2 各質問に対して0と回答した人数の割合

	1年4月	1年7月	2年9月	2年1月
何日/1週間	75.6%	68.2%	68.2%	70.0%
何冊/ひと月	48.9%	56.8%	59.1%	50.0%
先月読んだ本の冊数	51.1%	29.5%	56.8%	40.0%
先月読んだ絵本の冊数	64.4%	50.0%	36.4%	20.0%

2. 学年と時期ごとの読書習慣と量

読書習慣と量について、学年と時期によって違いがあるのか分析を行った(表3)。回答なしの場合や、数値に幅を持たせて記入した場合は、分析から除外した。各問の数値を従属変数として、学年と時期による1変量の分散分析を行った。その結果、「先月読んだ絵本の冊数」について、有意な差が見られた($F(3,168)=11.43, p<.001$)。TukeyのHSD法による下位検定を行ったところ、1年4月と2年9月、1年4月と2年1月、1年7月と2年9月の間に差が見られた($p_s<.05$)。1年と2年の間で、絵本を読む冊数が増えていることが示された。2年後期の最初と最後では平均値の差が見られなかったが、これは分散が大きいためであると推測される。そのため、「先月読んだ絵本の冊数」の回答の人数の分布を調べた。その結果、1年4月と7月、2年9月では0冊と答えた人数が多いのに対し、2年1月では3冊が8名、5冊が10名と複数冊読んでいる学生もいたことが明らかになった(表4)。

全体的には、読書が習慣化されていないことが分かる結果であるが、「ひと月に平均して読む本の冊数」や「先月読んだ本の冊数」については、2年1月に増加傾向にあった。特に「先月読んだ絵本の冊数」については、学年があがるにつれて増えており、さらには、絵本の読み聞かせ実践を行った2年の半年間でも増加している人がいることが示された。ここから、大学での学びを通して、読書への意識づけが進んでいる可能性があり、特に、授業の中で絵本を扱うことが、学生の絵本の読書を増やすことにつながっていると示唆される。

3. 学年と時期ごとの絵本への関与

絵本に対する関与について、学年と時期によって差があるのか分析を行った(表5)。各問の得点を従属変数として、学年と時期による1変量の分散分析を行った。その結果、「10. 私は絵本の読み聞かせが大好きである」において、有意な差が見られた($F(3,168)=3.55, p<.05$)。TukeyのHSD法による下位検定を行ったところ、1年4月と2年1月の間に差が見られ($p<.05$)、1年7月と2年1月の間に差の傾向が見られた($p=.069$)。また、「1. 私は絵本をもっと読みたい」において、学年と時期による差の傾向が見られ($F(3,168)=2.21, p=.089$)、2年1月に得点が高い傾向であった。

質問項目のうち、1~4は「絵本志向」、5~8は「絵本経験」、9~10は「読み聞かせ志向」の因子に分けられる。今回の結果は、「絵本経験」については学年によって違いはないが、「絵本志向」や「読み聞かせ志向」において違いが見られたということになる。したがって、大学での活動を通して絵本に対する意識が変化すると推測される。保育の現場を意識して実践的に絵本にたくさん触れることで、絵本そのものや絵本の読み聞かせが好きになるという効果があると考えられる。

表3 読書習慣と量に関する回答の学年と時期ごとの平均値と標準偏差

	学年と時期	平均値	標準偏差	人数
何日 /1 週間	1年4月	.4	.93	44
	1年7月	.7	1.41	43
	2年9月	.6	1.31	44
	2年1月	.5	.93	40
	総和	.6	1.16	171
何冊 /ひと月	1年4月	.9	1.23	44
	1年7月	.5	.71	41
	2年9月	.8	1.66	43
	2年1月	1.6	3.68	38
	総和	.9	2.10	166
先月読んだ本の冊数	1年4月	.9	1.43	45
	1年7月	1.0	.86	44
	2年9月	.9	2.07	44
	2年1月	2.0	3.76	40
	総和	1.2	2.28	173
先月読んだ絵本の冊数 1年4月<2年9月 1年7月<2年1月 1年7月<2年9月	1年4月	.7	1.17	45
	1年7月	1.2	1.57	44
	2年9月	2.8	3.91	44
	2年1月	3.8	3.60	39
	総和	2.0	3.04	172
自分で持っている本の冊数	1年4月	12.3	14.07	41
	1年7月	10.2	10.77	42
	2年9月	24.1	69.61	41
	2年1月	18.4	25.80	35
	総和	16.1	38.49	159
自分で持っている絵本の冊数	1年4月	7.3	12.60	41
	1年7月	5.9	8.33	42
	2年9月	7.5	11.63	41
	2年1月	5.8	9.03	37
	総和	6.7	10.50	161

表4 先月読んだ絵本の冊数の人数分布

		学年と時期				合計
		1年4月	1年7月	2年9月	2年1月	
先月読んだ絵本の冊数	回答なし	0	0	0	1	1
	0	29	22	16	8	75
	1	9	7	5	2	23
	2	3	9	8	3	23
	3	2	2	4	8	16
	4	1	2	2	3	8
	5	1	0	2	10	13
	6	0	2	1	1	4
	7	0	0	2	0	2
	10	0	0	3	2	5
	15	0	0	0	2	2
20	0	0	1	0	1	
合計		45	44	44	40	173

表5 絵本への関与に関する得点の学年と時期ごとの平均値と標準偏差

	学年と時期	平均値	標準偏差	人数
1. 私は絵本をもっと読みたい。	1年4月	4.6	.94	45
	1年7月	4.8	1.21	44
	2年9月	4.9	1.08	43
	2年1月	5.2	1.06	40
	総和	4.8	1.09	172
2. 私は絵本についてもっと勉強がしたい。	1年4月	4.8	1.04	45
	1年7月	4.9	1.25	44
	2年9月	5.0	1.00	43
	2年1月	4.9	1.17	40
	総和	4.9	1.11	172
3. 私は絵本が大好きである。	1年4月	4.7	1.05	45
	1年7月	4.8	1.29	44
	2年9月	4.9	1.07	44
	2年1月	5.2	1.00	40
	総和	4.9	1.12	173
4. 私は絵本の読み聞かせについてもっと勉強がしたい。	1年4月	4.9	.91	45
	1年7月	4.8	1.11	43
	2年9月	4.9	1.07	44
	2年1月	5.0	1.12	40
	総和	4.9	1.05	172
5. 私は子どものころ、よく絵本を読んでいた。	1年4月	4.8	1.26	45
	1年7月	4.7	1.25	43
	2年9月	4.9	1.43	44
	2年1月	4.8	1.54	40
	総和	4.8	1.36	172
6. 私が子どものころ、よく絵本の読み聞かせをしてもらった。	1年4月	5.1	1.05	45
	1年7月	4.8	1.31	43
	2年9月	5.3	1.12	43
	2年1月	5.0	1.45	40
	総和	5.0	1.24	171
7. 私には何回もくりかえし読んでいるお気に入りの絵本がある。	1年4月	4.2	1.66	45
	1年7月	4.4	1.59	43
	2年9月	4.2	1.62	44
	2年1月	4.4	1.84	39
	総和	4.3	1.66	171
8. 私はたくさんの絵本を持っている。	1年4月	3.1	1.63	45
	1年7月	3.4	1.63	44
	2年9月	3.2	1.76	44
	2年1月	2.8	1.68	38
	総和	3.2	1.68	171
9. 私は絵本の読み聞かせを子どもたちにするのが上手である。	1年4月	2.8	1.11	45
	1年7月	3.0	1.11	43
	2年9月	2.8	1.21	43
	2年1月	3.1	1.42	40
	総和	2.9	1.21	171

10. 私は絵本の読み聞かせが大好きである。 1年4月<2年1月 1年7月≦2年1月	1年4月	3.3	1.13	45
	1年7月	3.5	1.17	44
	2年9月	3.7	1.37	43
	2年1月	4.2	1.34	40
	総和	3.7	1.28	172
11. 私は絵本の読み聞かせについてくわしい。	1年4月	2.6	.98	43
	1年7月	2.7	1.04	44
	2年9月	2.2	1.24	44
	2年1月	2.6	1.43	40
	総和	2.5	1.19	171
12. 私は絵本の読み聞かせを子どもたちにたくさんしたい。	1年4月	4.4	1.01	45
	1年7月	4.4	1.28	44
	2年9月	4.1	1.37	44
	2年1月	4.6	1.39	39
	総和	4.4	1.27	172

4. 読書習慣と絵本への関与の関連

これまでの結果より、絵本の読み聞かせ実践を通して、絵本への関与が良い方向へ変化したことが示された。しかし、学生個人の活動への取り組み方（読書をしたかどうか、読書への意識）によって、絵本への関与も変わってくることは十分に考えられる。そこで、学年と時期を分けずに、読書をした学生ほど絵本への関与の程度が高いという関連があるか調べることにした。

読書習慣の6つの質問と絵本への関与の3因子の得点の相関を調べた。絵本への関与の「絵本経験」因子の質問のうち、「8. 私はたくさん絵本を持っている」は、読書習慣の「自分で持っている絵本の冊数」の質問と重なるため、得点を計算する際に、除外した。したがって、「絵本志向」は4項目、「絵本経験」は3項目、「読み聞かせ志向」は4項目の得点を合計したものをを用いた。結果は表5の通りであった。相関係数が2以上のところ（表6の網掛け部分）を抽出すると、「絵本志向」は「先月読んだ絵本の冊数」と相関が見られた。「絵本経験」は「自分で持っている絵本の冊数」と相関が見られた。「読み聞かせ志向」は「ひと月に平均何冊読むか」および「先月読んだ絵本の冊数」とそれぞれ相関が見られた。

以上から、実際に絵本を読んでいる量が多い人ほど、「絵本志向」や「読み聞かせ志向」が高いことが明らかとなった。さらに「読み聞か

せ志向」が強い人は、絵本のみならず、他の本の読書習慣がある（ひと月に読む本の冊数が多い）ことが示された。予想したとおり、実際の読書量は、絵本への関与の度合いと関連することが示された。

また、子どもの頃の「絵本経験」が「自分で持っている絵本の冊数」と関連していた。これは、幼い頃から絵本に囲まれ、親しんでいたという家庭環境が推察され、理解しやすい結果である。さらには、やや弱い相関ではあるが、「絵本経験」は「先月読んだ絵本の冊数」とも関連していた（表6の太枠部分）。これは、子どもの頃の家庭環境が大学生になっても影響を与えていることを示唆する。幼い頃から絵本に親しむことが絵本に対する態度を形成しているということが考えられ、大学での教育はどの程度効果を与えることができるのか、様々な指標を用いて長期にわたって検証していく必要がある。

絵本の読み聞かせ体験を通して、絵本への親しみを増し、実際の絵本の読む量も増えることがある程度は示唆された。授業実践を通して、さらに、読書意欲を高め、学習に向かう態度を形成することが最終的な目標となる。実践を重ね、学生にとって有益な学びの方法を探ることが望まれる。

【研究の成果と課題】

全体として、本・絵本の不読率の高さが顕著

表6 読書習慣と量に関する回答と絵本への関与の3因子の得点の相関

		何日/1週間	何冊/ひと月	先月読んだ本の冊数	先月読んだ絵本の冊数	自分で持っている本の冊数	自分で持っている絵本の冊数
絵本志向	Pearson の相関係数	.140	.197*	.162*	.208**	.073	.129
	有意確率(両側)	.069	.012	.035	.007	.365	.106
	人数	169	164	171	170	157	159
絵本経験	Pearson の相関係数	.046	.115	.010	.172*	.166*	.329**
	有意確率(両側)	.554	.142	.900	.026	.038	.000
	人数	167	163	169	168	156	157
読み聞かせ志向	Pearson の相関係数	.033	.202*	.166*	.258**	-.035	.198*
	有意確率(両側)	.669	.010	.032	.001	.668	.013
	人数	166	161	168	167	154	156

** $p > .01$ * $p > .05$

であった。しかし、授業実践で本や絵本を扱うことで、不読率は下がった。実践を行うことが、一時的ではあっても、効果を生むことが明確に分かり、実践を続けることの重要性が示された。

特に、今回1・2年生ともに「自分の興味のある本・絵本」からスタートし、読後情報を「少人数グループ内で言葉で共有する」パターンの実践であった。不読率の高い学生は、自分が選んだ本に対して他者からの思わぬ賞賛や共感の声を得ることによって、本を選んだ行為への自信をもつ。それは、自分の個性を確認するみちすじであり、学びの個性化につながるものであった。このように、1・2年生の間に学びの個性化と学びの実感(満足感)を図ることは、3・4年生になって保育・教育分野での専門性を高める学びの前段階として重要かつ基礎的な体験であると言えよう。

第2に、絵本の読み聞かせ実践の効果は、絵本を実際に読む行為につながっていた。これは、ただ読むという行為だけではなく、絵本への志向にもつながっていた。実践を通して、絵本を読み、絵本を好きになるという体験的变化を生んだと考えられる。

しかし、読む書くまとめるなどの個々のリテラシーの向上については、学生の書いた文章や話した言葉、コミュニケーションの様態の分析を詳細に行い結果を示すところまでは今回至らなかった。今後、抽出学生の、年度をまたいでの変化を丁寧に追うなどの方法をもって、引き続き、学科学生のリテラシーの向上のための方策を考察していきたい。

第3に、今回の結果からは、幼い頃から絵本に触れ、絵本に囲まれた環境で育った学生は、大学に入った後にも、実際に絵本を読むという関連性が示された。大学において、家庭環境を補償するような体験的学びが必要である。この点も、私達の今後の実践研究課題とする。

【参考文献】

平山祐一郎.(2015). 大学生の読書の変化—2006年調査と2012年調査の比較より—. 読書科学, 56 (2), 55-64.
 平山祐一郎.(2016). 保育系大学生の読書の傾向について—「絵本関与」の観点を加えて—, 日本教育心理学会第58回総会発表論文集, 245.
 平山祐一郎.(2017). 読書量の測定方法に関する一考察—保育系大学生の読書教育に向けて—, 東京家政大学博物館紀要, 22, 56-62.